

JCA NEWS



Japan Communication Association (JCA) Newsletter

日本コミュニケーション学会ニュースター



CONTENTS

| | | | | | |
|----------------------|-------|----|----------------|-------|----|
| 1. 巻頭言 | | 1 | 7. 広報局便り | | 17 |
| 2. 私にとってコミュニケーション学とは | | 3 | 8. 支部ニュース | | 19 |
| 3. 第52回年次大会 | | 5 | 9. マイページ登録のお願い | | 23 |
| 4. 2022年度 第3回理事会報告 | | 7 | 10. 編集後記 | | 23 |
| 5. 学術局からのお知らせ | | 13 | | | |
| 6. 事務局報告 | | 15 | | | |

133
2023.5

巻頭言

JCA との出会いと留学生との日々

内藤 伊都子 (東京福祉大学 教授)

日本コミュニケーション学会に入会したのは、大学院生のときでした。当時は大学院に興味を抱いていたものの、大学院がどのようなところであるのか、研究とは何なのかなどについて、ぼんやりとした考えのまま先生方に導いていただき、進学することになったのでした。地元の付属高校から大学も含めて内部進学であったため、慣れ親しんだ環境でのんびりと過ごしていたのですが、大学院ともなると外部の大学からの進学者や海外からの外国人留学生など、周囲には目的意識や研究意欲の高い院生たちが多く、大いに刺激を受けました。さらなる刺激を受けたのは、日本コミュニケーション学会の年次大会に参加したときのことです。



少し!? 遠い記憶になってきましたが、当時の日本コミュニケーション学会の年次大会では、大学院生など若手研究者の発表が目立っていたように思います。とくに、日本人大学院生の英語による発表者たちが強く印象に残っています。研究領域である異文化コミュニケーションと関連するいくつかの学会に所属していたのですが、日本人大学院生による英語での発表は、本学会の特徴の1つであるように思われました。アメリカなどの留学先から発表のために帰国し、質疑も英語で難なく応答し、週末明けにはまた機上の人になっているというスケジュールをこなしながら、研究に打ち込む姿に感服しました。と同時に、自身の研究活動に対しては不安を覚えたものです。現在も研究に携わることができるのは、本学会の会員でもある先生方や先輩方、仲間などによるさまざまな支援があつてのことであることは言うまでもありません。

あれから時が経ち、自身が大学院生を指導する立場にあることが、不思議に思えます。現在の本務校に着任してからは、担当がすべて留学生のため、正に異文化コミュニケーションの毎日で、東アジアや東南アジ

ア、東ヨーロッパなどからの留学生の指導に明け暮れています。留学生が言わんとする日本語を理解することがすっかり特技になってしまいました。指導教員に似たのか皆のんびりとしたところがあり、しっかりしている反面、幼さもあったり、研究指導だけでなくときには生活指導が必要になったりするなど心配が尽きません。本人たちは、心配事が解消した後で「先生、心配しないでください！」と言うのですが（心配させないでください…）と思わず心の声が漏れてしまっているときもあります。自身が大学院生の頃に感服した日本人留学生や日本人以上に日本に詳しくた当時の在日留学生とは様子が異なりますが、時代とともに在日留学生は出身も年齢も目的も事情もそれぞれ多様で複雑になってきましたし、一時滞在者というよりは修了後も日本に留まる人も少なくなってきたことなど、留学生を取り巻く環境は変化してきました。

また、研究環境も当時とはさまざまな点で変化しているといえます。たとえば研究倫理への対応は年々厳しくなっている印象ですし、ハラスメントの問題が取り上げられるようになると、厳しい指導だけでなく過度な期待も注意が必要になり、大学院生との向き合い方も複雑になってきました。コロナ禍においては社会調査が一層困難となり、院生たちも苦勞しています。このため、修士課程で終える予定の留学生には、学会への入会を勧めにくい状況ですが、一方で修了生からは、改めて教育や研究の道に進みたいと相談を受けることもあります。

今後も留学生との日々は続いていくと思いますが、高度外国人材としても期待されている留学生の育成は、本学会においても重要なのではないかと思います。自身が受けてきた刺激や支援のように、留学生にとっても本学会が先生方との出会いや支援の場となればと思いますし、自身も一助となれるよう今後も学会活動に携わっていかれたらと思っています。

私にとってコミュニケーション学とは

社会的変容過程としてのコミュニケーションに魅せられて

森泉 哲 (南山大学)

コミュニケーション学との出会いは、大学時代に中学校英語教師を目指して教育学部で英語教育を勉強しているところでした。ちょうど学習指導要領が改訂された議論が盛んで、英語教育に「国際理解」と「コミュニケーション」という鍵概念が入ったという時でもあり、自身の学校や家庭環境から他者とのコミュニケーションの難しさを感じていた時でもあったように思い出します。自己理解やコミュニケーションというのは、他分野と比較して、どういうわけか自分の興味がそそられる時だったのでしょ。



その後、現在までコミュニケーション学に魅せられているのは、これまでいろいろな研究者や著作物(者)との出会いを通して、自他の現実のとらえ方のズレ、その違いにどう折り合いをつけているのか(そしてできないのか)、またそれを乗り越えて新たな現実を創ろうとしているのか(一方できていないのか)、という点にあるように思います。この辺りは、社会的現実 (social realities)、間主観性(intersubjectivity)、調節(accommodation)、統合(integration)、変容(transformation)などの鍵概念や関連理論で説明されており、これらのテーマに関する理論や事例に出会う度に、なにか自分の中でひっかかりを感じたり、心が揺さぶられたり、時には共鳴したりしているプロセスのような気がしています。

さて、数年前に起こった名古屋入管での事件の映像が最近公開されました。これを見ると、同じ物理的空間におり、その対人距離は接触しているにもかかわらず、それぞれの現実や背景がいかに異なりすぎているのか、お互いに全く分かり合えない現実にいたという事実には絶望感を感じてしまいます。私も同じ名古屋市内に住みながらも、いかに心理的に他人事と考えてしまっていたのだろうか、なにかできたことはなかったらどうか…。一人の問題というよりも、その人が生きてきた時代や社会背景などのマクロレベ

ル、友人や家族関係などのメゾレベル、そして個人や相手との価値観や特徴などのマイクロレベルなどが複雑に絡み合いかつ相互作用しながらコミュニケーションが行われているということなのかなとも考えていますが、なにか一要因でも異なれば最悪の状況にならなかったのではないかと考えてしまいます。

日常場面においても、人々のコミュニケーションを観察して、「こうすればもっとうまくいくのに」と感じている一方で、自分のこととなると、まったくうまくできず、自分の主観的世界で判断し、「またやってしまった」と思うたびに、もっとコミュニケーション（学）について深めていきたい（いくべき）と考えているように思います。

今後、私自身や社会も変化を繰り返し、またその変化を余儀なくされる対象として、私自身はコミュニケーションにどうかかわっていくのだろうか、またコミュニケーション学は私をどこに連れて行ってくれるのだろうかと不安とともに期待の入り混じった複雑な心境にいます。いわゆる「人生の正午」をまわってしまった私にとり、自身のキャリアや生涯発達の課題もふっと頭をよぎってしまうことと相まって、コミュニケーションをめぐる変容プロセスに今後も注目していきたいと考えています。

第 52 回年次大会

学術局長 小西 卓三

第52 回年次大会は、2023 年 6 月 3 日（土）、6 月 4 日（日）の 2 日間開催されます。今年度の大会は、4 年ぶりの完全対面の大会となり、立教大学池袋校舎を会場として開催されます。会場校の師岡淳也先生をはじめとする関東支部の皆様方、学術局の日高勝之先生、菅野遼先生、事務局の松島綾先生、宮脇かおり先生、広報局の松本健太郎先生にはご尽力いただいていることを心より感謝申し上げます。

さて、今回の年次大会のテーマは「AI とコミュニケーション」です。AI 研究はコミュニケーション学においても、議論研究 (argumentation studies) の領域で 1990 年代から重要な知見が蓄積されてきました。2004 年には Springer から *Argumentation Machines: New Frontiers in Argument and Computation* という、議論研究者とコンピュータ科学者の共同による書籍が出版されています。AI と議論研究の発展は、『議論の技法』の著者であるスティーヴン・トゥールミン (Stephen Toulmin) や、対話論を用いた理論家であるダグラス・ウォルトンなど、コミュニケーション研究者にも馴染みのある研究者の知見に多くをよっています。このような状況を踏まえつつ、2023 年度の年次大会では、「AI」を焦点にあてて、コミュニケーションとの関係性をさらに検討するためのテーマを設定しました。

本テーマが設定された後の 2022 年 11 月に公開された ChatGPT は、コミュニケーション学のみならず、教育や研究活動など、「人間らしい」活動の景観を変えかねない射程を持ちうるものとして、認識され始めています。一般社会では生成される答えの著作権や事実関係の正確さの問題が、そして大学教育では剽窃などの問題がかかわります。官房長官の松野博一は 4 月 6 日に ChatGPT をはじめとする生成系 AI の教育現場での使用について判断をするための資料を文科省が資料の取りまとめを行う方針であることを記者会見で明らかにしています。また、公共放送 NHK でも、4 月 16 日に「広がる AI=人工知能 私たちはどう向き合う?」という番組が放送されました。

1 日目の基調講演では、人工知能学会で会長をつとめられ、知識ベース推論、機械学習、知能ロボットなどの研究に従事する一方で NHK サイエンスゼロ、あさイチなどで AI について啓蒙活動を行ってこられた山口高平先生に「議論できる AI の可能性と課題：ChatGPT の時代から考える」タイトルで基調講演をお願いし、記号推論 AI と ChatGPT の性能を評価し、議論できる AI の可能性と課題についてお話を頂きます。その直後のシンポジウムは「AI とコミュニケーション」というテーマで、山口先生の基調講演を踏

まえつつ、大橋理枝先生(放送大学)の司会進行のもと、鈴木志のぶ先生(北海道大学)、山田晴道先生(東京経済大学)という、コミュニケーションと議論、コミュニケーション・メディア論、大衆文化論などについて考察してこられた方々による議論を、「会場」の方々を交えておこなってまいります。

そのほか、公的な言論・言説に焦点を当てたパネル、新しい唯物論やポスト・コンテンツツーリズムがかかわる実践に焦点を当てたパネル、聴くことやインクルーシブネスを射程に入れたコミュニケーション教育のパネルなど、多彩なプログラムが用意されております。ポストコロナの状況下、AIの影響下で人間のコミュニケーションが変容する(しうる)中、他者の研究の成果を対面で聴き、交流するという営みの意味合いを考えつつ、会員の皆様と語りあう場にできたらと考えております。久しぶりの対面開催の中、一人でも多くの方にご参加いただき、会員同士の知的交流を深めていただきたいと願っております。

*今年度年次大会の基調講演・シンポジウムは立教大学異文化コミュニケーション学部の後援を受けています。

2022 年度 第 3 回理事会報告

日 時：2023 年 3 月 5 日(日) 13 時～

会場：オンラインでの開催

参加者：21 名 (敬称略)

守崎、高永、小山、松島、宮脇、脇、小西、日高、内藤、松本、今井、宮崎、高井、五島、宮原、水島、會澤、田島、毛利、谷口、吉武

欠席者：なし

議長：守崎(会長)

司会：松島(事務局長)

書記：脇(副事務局長)

会長挨拶

お忙しいところお集まりいただきありがとうございます。事務局から報告があると思いますが、立教大学（師岡先生）との調整・協議を重ねていただいた結果、無事に 2023 年度年次大会を立教大学で開催する運びとなりました。ご協力をよろしくお願いたします。

審議事項

【1】第 52 回（2023 年度）年次大会関連

1. 事務局

(1) 年次大会の基調講演とシンポジウムの共催について

小西学術局長から、基調講演とシンポジウム（いずれも一般公開）を立教大学との共催あるいは後援としたい旨の提案があった。共催・後援とすることで施設使用など大会準備・運営がスムーズになるとのことであった。

守崎会長から、共催とすることで本学会側に何らかの義務が発生するのか旨の質問があった。小西学術局長より義務は発生しないとの回答があった。これを受けて、まずは立教大学との協力（共催あるいは後援）について審議され、承認された。

続いて協力形態（共催あるいは後援）について審議された。理事からは共催・後援に関する利点と懸念がそれぞれ示された。守崎会長から、本学会への不利益が発生しないことが確認されたうえで、立教大学（師岡先生）が望むのであれば共催にして、特に望まないのであれば後援にするとの方針が示された。

審議の結果、この方針に沿って事務局が立教大学と協議することとなった。

(2) 年次大会のパンフレット作成と大会当日サポートの学生アルバイトとその費用について

小西学術局長より表題の件に関して、ここ数年パンフレット（プログラム）やポスターの作成を業者ではなく学生に依頼しており、2023 年度年次大会もそのようにするか、あるいは業者に外注するか、ご審議いただきたい旨の説明があった。

審議の結果、業者に依頼すると経費がかかるため、プログラムは事務局が準備しすべて電子媒体とする（紙媒体は準備しない）ことが承認された。また、ポスター作成については、高井理事を通じて大学院生に依頼する（1 名のみ：1 万円）ことが承認された。

(3) 出版社の年次大会協賛・後援などについて

小西学術局長から表題の件について説明があった。かつて年次大会（対面）ではプログラム（紙媒体）に出版社の有料広告（協賛・後援）を募っていたが、プログラムを電子媒体にするなど状況が変わっている。従来通りの案内・依頼では、出版社からの協賛・後援が得られないのではないかと。2023年度から実施するかどうかは別として、学会の収入源でもあるので何らかの方法を検討してほしいとのことであった。

理事からいくつかの方法が提案されたが、審議の結果、広報局で検討することになった。

(4) 年次大会でハイフレックスを準備するのか否か

小西学術局長から、感染症対策など万が一を考えてハイフレックス対応の準備をするかどうかについて、ご審議いただきたい旨の説明があった。

守崎会長から、現時点ではオンライン対応は考えないとの方針が示された。

審議の結果、この方針に沿って準備を進めることとし、もし状況が急激に悪化すれば開催校の対応も考慮して改めて審議することになった。

(5) 発表申し込みに関する報告

日高副学術局長から、年次大会発表の申し込みは昨年度と同じく12件（11件発表・企画1件）であり、12件すべて許可したい旨の説明がされた。フォントなど体裁が整っていないものや誤字・脱字が多いものについては、再提出を依頼するとのことであった。

審議の結果、承認された。

[2] 各局

1. 事務局

(1) 2023年度業務委託契約について

松島事務局長から、資料にもとづいて説明があった。昨年度とほぼ同様の内容であるが、「業務委託契約書」に「反社会的勢力の排除」という項目が追加された。また、「算定基準書（「その他」）」の「口座開設変更（1万5千円）」は会長交替による名義変更にかかった料金である。

審議の結果、承認された。

(2) 2023年度予算案

宮脇副事務局長より、資料にもとづいて説明があった。収入（年会費）については、会員数減少を考慮して保守的に見積もった。年次大会に関しては2019年（直近の対面開催）を参考にした。立教大学から年次大会の助成金（5万円）をいただける予定である。支出に関する昨年度からの大きな変更点は年次大会関係費である。プログラム作成費とプロシーディング作成費はデジタル化にともなってゼロにしている。今年度は対面開催なので講師交通費（5千円）、弁当代（1万円：基調講演者・シンポジスト）、役員弁当代（3万円：現場を離れられないスタッフ）を計上している。また、Zoomアカウント取得に関する費用はゼロとなっている。全体として赤字が大幅削減されている。ただ、会員数減少のために赤字解消にはいたっていない。

小西学術局長から、会場が小さく参加者を収容できない可能性があるため、Zoom対応の会場（教室）を設置するとの説明があった。そのため、Zoom費用は用意してほしいとのことであった。これを受けて宮脇副事務局長から、Zoom費用を計上する（ただし、最も利用人数の少ないもの）との回答があった。

審議の結果、すべて承認された。

(3) 支部大会講師交通費、宿泊費について

宮脇副事務局長より、これまで支部大会における講師の交通費・宿泊費については規定がなかったため、次のようにしたいとのことであった。すなわち、「講師として大学に所属していない方や研究費がない機関に所属している方を呼ぶ場合のみ、支部会計から支出可能とする」。ただし、以下の点についてもご留意願いたい。

- ① 支部大会助成金（3万円）＋支部活動助成金（3万円）の範囲内で対応
- ② オンラインを積極的に活用
- ③ 宿泊費を計上する場合、正当な理由を事務局（会計担当：宮脇副事務局長）に提出

理事から、この対応は講師がJCA 会員であっても非会員であっても同様か旨の質問があった。宮脇副事務局長から、講師が会員・非会員にかかわらず上記対応をとりたいとの回答があった。審議の結果、承認された。

2. 学術局

(1) ジャーナル関係

―第52巻第1号の査読結果について

内藤副学術局長から、表題の件について、1本が掲載可、3本が修正後掲載可、5本は掲載不可、1本は取り下げとしたいとの説明があった。なお、取り下げの理由は、投稿資格（第3条）を満たしていなかったためである。

審議の結果、以上のことが承認された。

―学会賞について

小西学術局長と内藤副学術局長から、表題の件について説明があった。

論文の部：該当なし

書籍の部：毛利雅子. 2022. 『法廷通訳翻訳における言語等価性維持の可能性：現場から問う司法通訳翻訳人の役割と立場』丸善プラネット

奨励賞：該当なし

上記書籍を授賞候補とする主な理由として、法廷通訳・翻訳に関する実情を紹介し、事例を通して法廷での通訳実践を検討することで、「意味の等価性」の重要さとその深い理解を促している点が挙げられた。また、法廷での通訳実践の改善に向けた提言と、コミュニケーション研究の関連諸領域に貴重な一次資料を提供している点も、高く評価できるとのことであった。

審議の結果、学会賞授賞について上記のとおり承認された。なお、学会賞の選定時、候補となった毛利中部支部長には一時退席をお願いした。

3. その他

(1) ジャーナル改革案について（ジャーナルワーキンググループ）

小西学術局長から、ジャーナル改革に関するワーキンググループ（WG）の進捗状況について報告があった。

まず、本WGの目的は「ジャーナルの紙面充実のために何ができるか、素案を考える：分厚く、バラエティ豊かに、学と社会への還元するために、なにができるか」であることが確認された。続いて、「ジャーナルを「厚く」するための理事会への提案」として次のことが説明された。

―研究論文・原著論文の投稿を増やす

―投稿原著論文ではないものを掲載する

―研究論文以外の区分を設置する。具体的には書評をジャーナルに掲載する。

―書評をジャーナルに入れる際のロジスティクス要検討。

―ジャーナルの締め切りや学会投稿の締め切りなどを、HPのわかりやすい場所にいつも見えるように配置し告知することが可能かも考える。

このほか、WGで話題にあがった事柄がいくつか情報共有された。理事からは、ジャーナルにおいて論文以外の掲載を増やすことに賛否の声があがった。本WGの発起人でもある五島理事から、WG設置の

目的は学会やジャーナルのありかたへの問題提起であり、従来の「論文」の枠を広げてもよいのではないかとの意見が出された。

これらの議論を受けて審議をした結果、現在の方向性（「書評掲載をニュースレターからジャーナルに移行」「書評に関わる担当者増員」）について承認された。そのほかの意見・提案については、引き続きWGで検討することになった。

報告事項

【1】第52回（2023年度）年次大会関連

1. 学術局

(1) 基調講演者の変更

小西学術局長より、予定していた講演者に連絡が取れなくなり（先方が多忙につき）、やむなく講演者を変更することにした。新たに山口高平氏（慶応義塾大学名誉教授）に依頼した。

(2) 年次大会での出版社ブースについて

小西学術局長より、年次大会当日における出版社のブース出店について確認があった。松本広報局長から、大会の場所・日時が確定して出版社に連絡するとの説明があった。小山副会長からは、広告・出店の値段は、広告1ページ1万円（半ページ5千円）、出店1日1万円であるとの説明がされた。今後、まず広報局が出版社に広告・出店の案内を送付するとのことであった。

(3) 年次大会会場校視察の予定

小西学術局長より、会場校視察の日程は調整中であるが、視察当日はeduroamを利用して機器確認などを行う予定であるとの報告があった。松島事務局長から、会場校・実行委員会側の会計担当と宮脇副事務局長との連絡を早めにとるよう要請があった。高永副会長から、会場校視察における大きな業務は「事務的な打ち合わせ（実行委員も同席するとよい）」「プログラムの作成」の2点であるとの確認があった。

【2】各局

1. 事務局

(1) 入退会者報告

脇副事務局長から、現在の会員数と入退会者について報告があった。2023年3月5日時点での会員全体数は299（一般会員：276名、学生会員：14名、準会員：1名、購読会員：1社、寄贈先：7）との報告があった。

(2) イベントの相乗りと交通費等の支給について

宮脇副事務局長から、学会内のイベントの相乗り（例：会場校視察と支部大会講師）は交通費等の支給が難しくなるので、避けていただきたいとの説明があった（交通費がでないイベントと紐付けた場合、交通費の支給はできない）。

(3) 大会会場視察の交通費について

宮脇副事務局長から、研究費から出せる先生は研究費でお願いするが、研究費がない方は本部会計（宮脇副事務局長）までご相談いただきたいとの説明があった。

(4) 支部活動にかかる経費について

宮脇副事務局長から、支部活動は支部活動助成金・支部大会助成金で賄うことになっているが、もし必要があれば（たとえば支部の周年事業）事前に積み立てるなどの対応が可能であるとのことであった。これによって繰越金が多くなる場合（5万円を超える場合）は、その旨を報告していただきたいとのことであった。

2. 学術局

(1) ジャーナル関係

内藤副学術局長から、次のことについて報告があった。

—「『日本コミュニケーション研究』第51巻 第51回年次大会特集号」について
2023年1月末に発行された。

—第52巻第1号の査読結果について

締め切り時点での応募は10本であり、1本が掲載可、3本は修正後掲載可、5本は掲載不可、1本は取り下げであった。3本の「修正後掲載可」の論文については、修正論文提出後、査読者に確認依頼をする。

—第52巻第2号の投稿状況について

現在までに再査読1本の提出があった。

—ジャーナル発行における今後の方針について

今後のジャーナルは、次に示した査読結果と掲載時期に関するルールに沿って発行される。

- ルール1 (A) 9月末締切の査読に通った論文がある場合は、次年度7月に第1号が出版される
- ルール2 (B) 3月末締切の査読に通った論文がある場合は、次年度1月に第2号が出版される
- ルール3 (A+B) 9月末締切の査読と3月末締切の査読に通った論文がある場合は、次年度7月に第1号、次年度1月に第2号がそれぞれ出版される
- ルール4 (Aが充たされずBは充たされる)9月末締切の査読に通った論文はないが、3月末締切の査読に通った論文がある場合は、次年度1月に合冊号が出版される
- ルール5 (AもBも充たされない)9月末締切と3月末締切のどちらの査読にも通った論文がない場合には、次年度1月に年次大会特集号が出版される
- ルール6 (Aは充たされたがBが充たされない)9月末締切の査読に通った論文はあるが、3月末締切の査読に通った論文がない場合は、次年度7月に第1号、次年度1月に年次大会特集号が出版される

3. 広報局

(1) ニュースレター131号・132号の発行とニュースレター133号の予定

今井副広報局長から、ニュースレター131号(2022年11月号)、132号(2023年2月号)が発行されたとの報告があった。次号となる133号は2023年5月に発行予定となっている。

(2) HPへの掲載情報

宮崎副広報局長から、以下の情報が学会HP【ニュース】に掲載された(前回理事会~2023年2月27日、16件)旨の報告があった。

- ・2023年02月07日【ニュース】2022年度中部支部大会開催のお知らせ:3月4日(土)愛知淑徳大学&Zoom
- ・2023年02月02日【ニュース】関東支部2022年度定例研究会のお知らせ:3月19日(日)立教大学
- ・2023年01月26日【ニュース】ニュースレター132号を発行しました
- ・2023年01月26日【ニュース】2022年度JCA関西支部春季研究会のお知らせ 3月4日(土)
- ・2023年01月24日【ニュース】非常勤・英語教員募集のお知らせ(開智国際大学)2023年1月31日(火)必着
- ・2023年01月16日【ニュース】年次大会プログラム掲載要旨(「要旨」)およびプロシーディングス掲載原稿(「原稿」)執筆要領のお知らせ

- ・2023年01月09日【ニュース】東海大学国際シンポジウム「異「言語」接触とミライ」3月18日（土）のお知らせ
- ・2022年12月01日【ニュース】九州支部大会12月11日（日）開催のお知らせ
- ・2022年11月24日【ニュース】『九州コミュニケーション研究』発行のお知らせ
- ・2022年11月09日【ニュース】「NHK番組アーカイブス学術利用トライアル」2023年度前期公募のお知らせ
- ・2022年11月02日【ニュース】『日本コミュニケーション研究』第52巻第2号論文募集のお知らせ
- ・2022年10月31日【ニュース】2022年度関西支部大会11月20日（日）9:30～12:20のお知らせ
- ・2022年10月30日【ニュース】ニュースレター131号を発行しました
- ・2022年10月12日【ニュース】第37回異文化コミュニケーション年次大会の申込開始のお知らせ
- ・2022年09月29日【ニュース】台風15号で被害にあわれた皆さまへ
- ・2022年09月28日【ニュース】「NHK番組アーカイブス学術利用トライアル 研究報告会2022」のお知らせ

(3) ML/Twitter での情報発信について

松本広報局長から、表題の件について報告があった。

- ・HP掲載情報のうち、会員向けに共有すべきものに関してはMLにて配信をおこなっている（前回理事会以後19件）。
- ・HP掲載情報、およびそれ以外の情報（会員の新刊情報等）を含め、学会公式Twitterを通じて発信をおこなっている（前回理事会以後6件）。

(4) 旧ウェブサイトに関連する問題について

松本広報局長から、本学会が長らく使用してきた旧ウェブサイトのドメインが闇サイトの業者によって取得され、そこにアクセスしようと試みると問題のあるサイトに誘導されることが判明した旨の報告があった。旧ドメインを取り戻すことは事実上困難であり、現状では解消の目途が立っていないとのことであった。引き続き、会員向けに注意喚起を行うとのことであった。

4. その他

協副事務局長から、次の2点について、まずは事務局で検討を開始したい旨の報告があった。できれば次回理事会にて、事務局案を示したいとのことであった。

- ・会費滞納による除名者の再入会
- ・休会制度

【3】各支部報告

各支部報告を参照。

【4】次回理事会開催日時・会場

5月27日（土）、午後1時、オンライン

学術局からのお知らせ

ジャーナルに関するお知らせ

『日本コミュニケーション研究』(Japanese Journal of Communication Studies)は、同一巻の第1号と第2号を同一年度内に発行できるように調整したため、2023年1月に発行されました。今回は第51回年次大会特集号として、基調講演やシンポジウムのほか、コミュニケーション理論研究会による論考も掲載しています。また、第52巻第1号への投稿は、昨年9月末に締め切りとなり10本の投稿、第2号は本年3月末に締め切りとなり3本の投稿がありました。

現在は、第53巻第1号(2024年1月末発行予定)への投稿論文を募集中です。締め切りは9月末日ですので、是非皆さまの研究結果を論文としてご投稿ください。投稿は、ワード等で作成された「論文」「シノプシス」「ファイル作成に使用した機種を加えた著者情報」の3つのファイルを添付して、以下の指定メールアドレスに送付するという形でお願いいたします。投稿や執筆の詳細につきましては、公式ホームページにある最新の「研究論文集投稿規程」「学会誌執筆要項」をご参照ください。投稿される際は、ジャーナル専用アドレスに加え、編集委員長のメールアドレスにも「CC:」にて送付をお願いいたします。

メールアドレスは以下の通りです。

To: journal[@を入れる]caj1971.com

CC: itnaito[@を入れる]ed.tokyo-fukushi.ac.jp

上述したメール投稿で受領の返信がない等の不具合、また、ジャーナル投稿に関するその他のお問い合わせは、ジャーナル担当の内藤(itnaito[@を入れる]ed.tokyo-fukushi.ac.jp)までご連絡ください。可能な限り迅速に対応いたします。皆さまのご投稿を心よりお待ちしております。

2022年度ジャーナル『日本コミュニケーション研究』掲載論考

『日本コミュニケーション研究』第51巻第51回年次大会特集号(2023年1月発行)

基調講演

先崎 彰容：危機・人間・共同体—令和日本のデザイン—

シンポジウム

先崎 彰容・師岡 淳也・福本 明子・日高 勝之：危機とコミュニケーション

師岡 淳也：コミュニケーション・コミュニティ・コモン再考—対立と分断が深まる社会における議論の可能性

福本 明子：令和日本のリテラシーの模索—いかに情報を読み、声を足すことができるのか—

日高 勝之：コモンセンスと「令和日本のデザイン」—先崎彰容氏の問いとその行方を考える—

特別企画 コミュニケーション理論研究会

柿田 秀樹：モノとコミュニケーション—「主体」の所在を問い直す—

石黒 武人：「主」・「客」の循環が織りなす動態としてのコミュニケーション—異文化コミュニケーション研究および準-客体論の視点から—

柿田 秀樹：コミュニケートするモノ—実在としてのモノとレトリカルな力

松本 健太郎：幽霊が宿る「モノ」と「場所」 それとの虚構的コミュニケーションの組成を問いなおす

学会賞の選考結果について

去る2023年3月1日～4日にメール審議にて学会賞の選考委員会を開催し、2022年度の学会賞について検討いたしました。今回は、ジャーナル掲載論文がなかったため、書籍の部のみの審査となりました。応募は1本でしたが、審査の結果、受賞候補として推薦することになりました。この推薦結果は、3月5日に行われた理事会において審議の結果、承認されました。毛利先生、おめでとうございます！ 選考委員会は、以下のようにこの書籍を評価いたしました。

日本コミュニケーション学会 学会賞（書籍の部）

毛利雅子『法廷通訳翻訳における言語等価性維持の可能性：現場から問う司法通訳翻訳人の役割と立場』丸善プラネット, 2022

本書籍は、法廷通訳に焦点を当て、等価性を踏まえた良い通訳、法廷通訳者がおかれている社会的立場の紹介、事例研究を通じた法廷通訳実践の検討を行っている。焦点は法廷通訳にあるが、「良い通訳」について考察する点において通訳（および翻訳）一般に対し含意するところが大きい。さらに、等価性を考える際に文化を踏まえて通訳にあたることの重要性が強調されており、文化間コミュニケーションへの含意も大きい。また、筆者が自身の通訳実践を踏まえて提示した第2部の日英ハイブリッドテキスト（法廷通訳を含む2つの裁判のシナリオ）は、トランスレーション研究、ディスコース分析、議論研究、ディベート教育などのコミュニケーション学の様々な研究を発展させるための基礎資料としても用いることが可能である。通訳実践をコミュニケーションの問題として検討するとともに、コミュニケーション学の諸領域に基礎資料を提供しているという価値も大きく、本書籍はJCA学会賞書籍の部に値すると考えられる。

なお、学会賞の授与式は4年ぶりに対面開催となる2023年度年次大会の総会の場で行います。受賞者には第52回年次大会にて簡単に「受賞のあいさつ」をお願い申し上げます。

今後も充実した『日本コミュニケーション研究』の発行に努めてまいりますので、皆さまからのご投稿、ご協力をお願い申し上げます。

（副学術局長：ジャーナル担当 内藤伊都子）

事務局報告

事務局からのご報告とお願い

1. 2023年度年会費の請求について

2023年度の年会費は4月に請求書を発送しておりますが、学生会員・準会員の会員の方は、7月の申請締め切り後の請求書発送となります。

3. 会費滞納による除名とジャーナル受け取りの権利について

過去3年間の会費がすべて未納の場合には、会則第12条および内規6に従い、特別な理由がない限り除名となります。また会則内規5に従い、前年度の会費が未納の場合にはジャーナルをお送りすることができませんのでご了承ください。

4. 会費納入状況の確認について

会費の納入状況が不明の場合には事務局までお問い合わせください。事務局のメールアドレスは、jcom-post[@を入れる]as.bunken.co.jp です。納入状況をご確認の上、下記の郵便振替口座にお振込みいただくこともできます。なお、振込手数料は各自のご負担にてお願いいたします。

郵便振替口座番号 00160-2-603688

口座名義 日本コミュニケーション学会

(銀行口座からお振込の場合)

ゆうちょ銀行 (9900)

〇一九 (ゼロイチキュウ) 店 (019)

当座 0603688

ニホンコミュニケーションガクカイ

※海外在住などで振込が困難な方はクレジットカードでの会費支払いにも対応いたします。詳しくは事務局までお問い合わせください。

5. 学生会員・準会員登録申請について

学生会員 (大学院生対象)、準会員 (学部生対象) として登録するには、登録申請が毎年必要です。既会員の申請期限は7月末日です。申請書のフォームは学会ホームページの「会員各種手続き」よりダウンロードし、学生証等のコピーを添付して郵送で事務局までお送りください。事務局の住所は次の通りです。

〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター

日本コミュニケーション学会事務局

6. 年次大会総会はがきについて

4月に年次大会の総会葉書を送付いたしました。必要事項をご記入の上、期日までに返送いただきますようお願いいたします。

7. マイページの利用開始について

ホームページ上の「マイページ」(会員情報管理システム) が利用できるようになっております。マイページでは「会費納入状況の確認」「会員情報の検索」「会員情報の変更・確認」などができます。マイページへのアクセスに必要なIDとパスワードは、年会費の請求書と一緒にお送りしております。「お振り

込みに関係するご注意」の欄に〈マイページのご案内〉がありますのでご覧ください。もしこの用紙を紛失なされた場合には、日本コミュニケーション学会事務局（以下「学会事務局」とする）までお問い合わせください。

問い合わせ先： 日本コミュニケーション学会事務局
jcom-post[@を入れる]as.bunken.co.jp

8. 住所等変更届のお願い

住所や所属が変更になった場合には次のいずれかの方法で手続きをしてください。

- (1) 日本コミュニケーション学会HPにある「マイページ」にアクセスし「会員情報の変更」を選択して必要事項を更新してください。メールアドレスの更新も「会員情報の変更」内で行うことができます。
- (2) 学会事務局までメール、郵送、ファックスのいずれかでご連絡ください。

9. ジャーナルバックナンバー、記念図書の購入申込みと閲覧・複写申込み

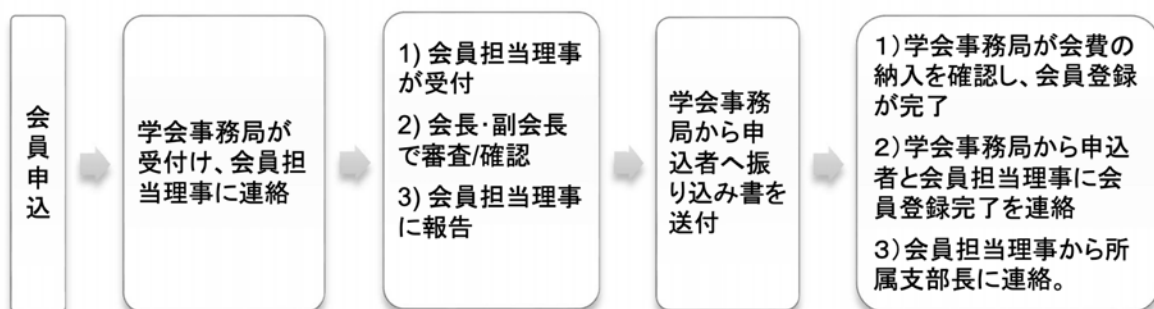
これまで発行されたジャーナルバックナンバーなど学会発刊物を購入されたい場合は、学会事務局にお問い合わせください。また、科学技術情報発信・流通総合システムJ-STAGE

(<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja/>) あるいは国立情報学研究所の論文情報ナビゲータCiNii (<http://ci.nii.ac.jp/>) やCiNii Research (<https://cir.nii.ac.jp/?lang=ja>) にも論文が掲載されており、閲覧・印刷することができますので、こちらも是非ご利用ください。同サービスを利用せずに複写をご希望の場合は、学会事務局までお問い合わせください。

10. 新規会員の手続き

JCAでは新しい会員を随時受け付けています。次頁のような流れで、新規会員の手続きを行います。ご不明な点がございましたら、学会事務局までご連絡ください。皆様のご協力をお願い申し上げます。皆様のご協力をお願い申し上げます。

【会員申込から会員登録完了までの流れ】



広報局便り

1. 新刊情報提供のお願い

広報局としては、会員の皆様の新刊情報を学会公式 Twitter(@jca_1971)およびMLで発信・配信していきたいと考えております。自薦、他薦を問わず、新刊のご著書に関する情報をお寄せいただきたく、お願い申し上げます。ぜひ、ご検討ください。

※学会ホームページに記載されている「基本方針」に合致しないものに関しては、学会公式 Twitter 等での発信をお断りする場合がございます。ご了承下さい。

<http://jca1971.com/keynote>

2. 広報局からのお知らせ

- ① 広報局では ML をもちいて、学会 HP における掲載情報を中心に会員の皆様あての情報配信をおこなっております。それらが届いているかをご確認いただいたうえで、もし不達の場合には、JCA ニュースレター今号 23 ページのご案内をご参照いただき、マイページへの登録手続き/メールアドレスの更新をお願いいたします。
- ② 広報局では各支部や各研究会の情報、他学会や教員公募などの情報も、ホームページにアップロードしていきたいと考えております。ぜひ、情報をお寄せください。
- ③ 皆様からも、国内だけでなく、海外の学会を含めて関連する講演会や研究会があれば情報として広報局までご一報下さい。ホームページにアップロードしたいと思います。
- ④ ホームページ (<http://jca1971.com/>) は、適宜更新しております。ご意見やご質問を頂ければ幸いです。
- ⑤ JCA 公式 Twitter(@jca_1971)も適宜更新しております。是非フォローをお願いいたします。

(広報局長 松本健太郎)

JCA ニュースレターへのご寄稿のお願い

日本コミュニケーション学会では、ニュースレターへの会員の皆様のご寄稿を募集しております。以下の要領で奮ってご寄稿ください。宛先：今井達也 (imatatsu.jca[@を入れる]gmail.com)

① 著書紹介

会員の皆様の著書を紹介するコーナーです。自薦、他薦を問わず、会員の皆様の著書をご紹介します。和文・英文で1枚程度（A4）の原稿を受け付けております。

② コラム：コミュニケーション教育

コミュニケーション教育に関する実践報告、事例紹介、展望、論考、その他のエッセイを受け付けています。

和文・英文で1枚程度（A4）の原稿を受け付けております。

③ NL 表紙の写真

ニュースレターの表紙を飾る写真を募集しております。本学会のNL表紙に相応しい写真がございましたら是非お寄せください。（写真は、会員の皆様ご自身でお撮りになったもの、または著作権をお持ちの写真に限ります。また、写真内容が法令に触れないようご配慮ください。）

支部ニュース

北海道支部

(支部長 水島 梨紗)

2023年3月4日に、JACET (大学英語教育学会) 北海道支部、HELES (北海道英語教育学会) とのオンライン合同研究会が開催されました。当日は英語教育関連のテーマに関する研究発表が並び、英語の多義語指導のあり方や、EFL 環境 (外国語として英語を学ぶ環境) での効果的な授業設計についての議論の他、WTC (Willing to Communicate、コミュニケーションを図ろうとする態度) と英語学習の目標との関係についての興味深い研究発表とディスカッションも行われました。

東北支部

(支部長 會澤 まりえ)

東北支部では、創立30周年を祝して記念誌を2023年3月に紙媒体とデジタル媒体の両方で発行しました。内容は、巻頭言 (支部長) ・現会長祝辞 (守崎誠一先生) ・第14代会長祝辞 (宮原哲先生) ・第15代会長 (五島幸一先生) ・第16代会長 (高井次郎先生) ・支部会員メッセージ・他学会東北支部長メッセージ・大会・研究会開催の記録・活動写真・歴代役員名簿・編集後記からなる全24頁で、編集は五十嵐紀子先生と會澤が担当しました。



JCA 東北支部創立30周年記念誌表紙

前回の創立20周年記念誌にご寄稿いただいた本学会歴代会長の祝辞が第1~14代会長まででしたので、それを繋ぐ意味で今回は第14代から現在

の第17代会長にご祝辞をいただきました。ご寄稿いただきました皆様にこの場をお借りしてお礼申し上げます。また、創立20周年・30周年記念誌PDF版は、東北支部ブログに掲載してあります (<http://tohokucaijugem.jp>)。

本支部2022年度の定例研究会を大会委員長小林葉子副支部長のもとで2023年3月18日(土)にオンライン(Zoom)で開催いたしました。参加者11名で、発表は次の4件でした (敬称略) : (1) 青田 美香 (東新潟中学校) ・関 久美子 (新潟青陵大学短期大学部) ・山内 俊博 (にいがた自立生活センター・まいらいふ) 「特別支援学級におけるヒューマンライブラリーの実践と気づき」、(2) 小島正美・宮曾根美香 (東北工業大学) 「オブジェクト指向設計によるコミュニケーションモデルの一考察—コロナ禍における児童・生徒におけるいじめ・不登校対応チームのモデル構築—」、(3) 川内規会・伊藤瑠美・大西基喜 (青森県立保健大学) 「青森県内の外国人からみた医療者のヘルスコミュニケーション調査」、(4) 宮曾根郁 (明星大学通信教育課程履修生) ・宮曾根美香 (東北工業大学) 「女子大学生の役割意識と恋愛行動の関係性」。今回は非会員の方も共同発表者に加わっていただき盛会となりました。

2023年度の活動として、支部研究大会 (秋オンライン開催) と定例研究会 (春対面開催) を予定しています。



JCA 東北支部定例研究会3月18日

関東支部

(支部長 田島 慎朗)

関東支部は、2023年3月19日の午前10時から、2022年度の定例研究会を開催しました。以前の年次大会のテーマ「現在地/現在知」を緩やかに引継ぎ、研究会のテーマを「コミュニケーション学の今とこれから」と設定しました。参加者の先生方に、ご自身の専門の現在と未来についてのお話を頂くという趣旨でした。

研究会はパネル・ディスカッション形式を採用し、専門分野・領域を代表するお三方の先生方にご発表いただきました。まず一人目は関西大学の守崎誠一先生で、定量研究の動向を、P値の扱い方に焦点を当てながらご発表いただきました。続く二人目は立教大学の師岡淳也先生で、米国のコミュニケーション学会ならびにレトリック研究のコミュニティの動きについてご発表いただきました。最後の三人目は二松學舎大学の松本健太郎先生で、メディア技術とコミュニケーションの認識についてご発表いただきました。

基本的に人選は支部会員で行いましたが、支部長である私が個人的にぜひともお話を伺いたいと思っていたお三方にお越しいただくことになりました。お集まりいただいた方々からも、討議時間と会後のアンケートから、ご満足いただいたことがうかがえました。発表をいただいた先生方をはじめ、ご参加いただいた方々に深く御礼申し上げます。

なお、研究会は対面形式とZoomを同時並行したハイブリッド型で行いました。技術的な部分でまだまだ足りていないところがあったものの、対面・Zoom両方の参加者から、十分に意思疎通が取れたというお話を頂きました。2023年度年次大会で講じる可能性のある「万が一の事態」にも、ある程度柔軟に対応できることが確認できました。

2023年度には、6月の年次大会の運営を行います。そして年度末にはまた定例研究会を開催いたします。両方とも、奮ってご参加下さい。

最後に、関東支部では支部運営委員を募集しております。原則関東地方にお住まいで、コミュニケーション研究・教育活動への参加にご興味がある方は、ぜひとも支部運営委員の小西卓三先生（昭和女子大）、菅家知洋先生（東海大学）、松本健太郎先生（二松學舎大学）、または私田島までご一報いただけますと幸いです。

中部支部

(支部長 毛利 雅子)

支部大会開催報告

2023年3月4日（土）13:00から、中部支部大会を開催しました。今回は3年ぶりに愛知淑徳大学で対面開催、加えてオンライン（Zoom）も含めてのハイブリッド開催となりました。



今回の中部支部大会は二部構成とし、前半は第一部『多言語化する日本』というテーマで、「日本における司法通訳—コミュニケーション学の視点から」（名古屋市立大学大学院・毛利雅子）と「多文化共生社会に求められる教員養成の異文化理解教育のための試案」（ロレーナ・ロハスさん、名古屋

市立大学大学院人間文化研究科博士前期課程修了)から発表がありました。

また後半は、第二部『自律学習と第二言語習得』と題し、『自律的なことばの学習を目指して』というタイトルで、工藤節子先生(東海大学日本語文化学系)に台湾からご講演頂いたのち、『日本人大学生英語学習者の「自律性」の発生と変容:留学が学習者に与える影響の観点から』というタイトルで土屋加恵さん(南山大学大学院人間文化研究科言語科学専攻修士課程)から研究発表がありました。

対面・zoomを通して多くの方にご参加いただきましたこと、お礼申し上げます。

関西支部

(支部長 小山 哲春)

関西支部では、2022年度関西支部春季研究会は2023年3月4日(土)関西大学梅田キャンパスにて、3年ぶりに対面で実施されました。研究会には関西支部以外の皆様や非会員の皆様も含め6名のご参加をいただき、参加者全員による「ビブリオ・バトル」風「(コミュニケーション、コミュニケーション学に関して)私が薦めるこの一冊/一本の紹介」を行いました。コミュニケーション研究者としての自身に多大な影響を与えた一冊、学生にどうしても読んで欲しい一冊、最新の進化生物学からの知見を得るための一冊、さらには大学院生、学部生からはご自身の研究の対象あるいは基盤となっている一冊(あるいは論文)の熱のこもった紹介があり、参加者との質疑応答も発表者それぞれの持ち時間を大幅に超過して盛り上がりました。また、こちらも3年ぶりに研究会後の懇親会を開催し、やはり研究会後のお酒の入ったコミュニケーションの楽しさと大切さをあらためて感じる1日となりました。



研究会の様子 + 意気揚々と懇親会に向かう参加者

なお、6月の全国大会では、同企画を関西支部パネルとして実施いたします(6月3日(土)10:00~)。皆様もぜひご参加ください!

中国・四国支部

(支部長 谷口 直隆)

中国・四国支部では、2023年3月4日(土)に第25回支部大会をオンラインで開催いたしました。

研究発表

- ①谷口直隆(広島修道大学)「コミュニケーション能力の育成を担う教科としての国語科の意義と特性に関する考察」
- ②脇忠幸(福山大学)「アクティブラーニングにおける「コミュニケーション」観」

例年通りの少人数の会でありましたが、その分、それぞれの発表について充実した意見交換が行われました。これもいつもどおりの光景です。この3年間の間、オンラインでの開催となりましたが、参加者は増えもせず、減りもせず、という状況で、移動や準備、経費の必要がないという利点も多くあるものの、「参加者の増加にオンラインが一役買う」ということは中国・四国支部では非常に限られた範囲にとどまりました。今後は、研究会及び大会の維持のためにハイフレックス型での実施を検討していきます。

九州支部

(支部長 清宮 徹)

2023年度より九州支部長を務めることになりました西南学院大学の清宮徹と申します。以前はJCAの大会運営理事や事務局を担当してきましたが、久しぶりにJCAにもどり、九州支部で活動して参ります。どうぞよろしく願いいたします。

九州支部はとてもユニークな支部であることは、JCAで活動していた時から感じておりました。支

部でありながら、全国から会員が集まって活動し、支部の紀要を発行するという小規模ながら一つの独立したような組織でありました。これからは九州支部とともに活動し、日本のコミュニケーション学会全体の活性化に結び付けられれば良いと考えています。

さて九州支部では、昨年 2022 年 12 月 11 日 (日)に第 29 回大会を開催し、その報告は前支部長の吉武先生より前号においてすでに報告されています。この内容を含めた九州支部の「ニュースレター」が先月発行されました。以下のリンクからぜひご覧ください。

http://kyushu.jca1971.com/newsletter_40.pdf

また、新しい運営委員会が結成されました。これまでの運営委員の先生方には、そのご貢献に心からお礼を申し上げます。以下に、新運営委員を紹介いたします。

支部長 清宮徹 (西南学院大学)
副支部長 野中アンディ (コミュニケーションスキル協会)
事務局長 吉村美路 (愛知東邦大学)
副事務局長 平野順也 (熊本大学)
運営委員 総務担当 塙幸枝 (成城大学)
運営委員 研究紀要担当 吉武正樹(福岡教育大学)
運営委員 研究紀要副担 友池梨紗(愛知淑徳大学)
運営委員 NL 担当 丸山真純 (長崎大学)
運営委員 HP 担当 上土井宏太 (鹿児島大学)
会計監査 蘭紅艶 (福岡女学院大学)

いろいろなお意見やご要望がありましたら、支部会員に限らず、ぜひお知らせいただければ幸いです。

連絡先

〒162-0801

東京都新宿区山吹町 358-5 アカデミーセンター

日本コミュニケーション学会事務局

Tel: 03-6824-9372

Fax: 03-5227-8631

[jcom-post@\[をを入れる\]as.bunken.co.jp](mailto:jcom-post@[をを入れる]as.bunken.co.jp)

マイページ登録のお願い

日本コミュニケーション学会 広報局

1. マイページの利用開始について

マイページでは「会費納入状況の確認」「会員情報の検索」「会員情報の変更・確認」などができます。新しい HP の右上のバナーからログインできますので、**できるだけ早い時期にアクセスしていただき、記載内容の確認・登録・更新をお願いいたします。**マイページへのアクセスに必要な ID とパスワードは、年会費の請求書と一緒に送っております。「お振り込みに関するご注意」の欄に〈マイページのご案内〉がありますのでご覧ください。もしこの用紙を紛失なされた場合には、日本コミュニケーション学会事務局（以下「学会事務局」とする）までお問い合わせください。

問い合わせ先： 日本コミュニケーション学会事務局
jcom-post[@を入れる]as.bunken.co.jp

2. 住所等変更届のお願い

住所や所属が変更になった場合には次のいずれかの方法で手続きをしてください。

- (1) 日本コミュニケーション学会 HP にある「マイページ」にアクセスし「会員情報の変更」を選択して必要事項を更新してください。メールアドレスの更新も「会員情報の変更」内で行うことができます。
- (2) 学会事務局までメール、郵送、ファックスのいずれかでご連絡ください。

編集後記

JCA で理事として働かせていただき、合計で結構な年数が経ちました。その間、様々な入れ替わりがありましたが、いまだに自分が「若手」的なポジションであることに驚きました。どう考えても、自分の未熟さ故のこの現状なのですが、やはり JCA にもっと若手の研究者が活躍できる場があるといいなと感じます（年齢的な若さではなく、キャリアとして年数が少ない方、という意味で）。会員数を増やすという意味でも、若手の研究者に JCA に興味を持ってもらうということは急務だと感じます。

一方で、文部科学省のデータなどを見ますと、大学院進学者が長期的に見て減少傾向であるようです。少子化の影響もあり、この傾向が今後も進むと見て間違いのないのではないでしょうか。ことコミュニケーション学に関して言えば、海外にも質の高い大学があり、なかなか日本で「コミュニケーション学に興味がある若手の研究者」に JCA に興味を持ってもらうことは難しい課題かも知れません。

若手の研究者に共通の興味・懸念は、持続可能なキャリアだと思います。JCA がそういった方々にとって、学びを深めながら、安定したキャリアに近づけるような、心理的安全性の高い場になるように、できることからやってきたいと感じています。そういえば私も、主に中部支部の先生方にそのような場を JCA で作っていただいたおかげで、今の自分があるのだと再確認しました。お世話になった先生方に、感謝の気持ちを伝えないとと思っています（思ってるだけでなく、やります）。

広報局 ニュースレター担当 今井 達也